

大学

アーカイブズ

研究部会報告

全国大学史資料協議会東日本部会会報

1999. 11. 12 No.21

Eastern Japan Section, The Japanese
Association of College and University
Archives

大学資料の調査収集・その現状と課題

明治大学歴史編纂事務室 鈴木秀幸

はじめに

大学資料のことはともかく、一般に資料の調査収集に関する論考は少なくない。中には、いわゆる「ハウツウ」ものまである。とはいっても、その最良のものというと見出しがいい。それだけに、資料の調査収集は地域とか分野などの面で範囲が広く、また条件や体制もさまざまであり、なかなか包括して述べにくいのであろう。実際、ここで述べることも最善なものではない。ましてやサクセスを語ろうとするつもりもない。あくまでも問題提起があるので、御指導や御批判をいただければと思う。

なお、本稿は全国大学史資料協議会東日本部会の研究会報告「大学史料の収集と整理について」(『明治大学歴史編纂事務室報告』第20集「明治大学の大学史料」収載)に続くようなものである。

1. 二人の遺したもの

—「足」と「頭」を使う—

(1) 宮川 康氏のこと

今年の夏は猛暑が続いた。それだけでも気が萎えてしまうのに、それ以上の衝撃が筆者を襲った。それは二人の方の死であった。一人は宮川康氏。氏は近代の地方金融史を研究の専門としていた。しかし、何といっても明治大学の大学史の道を切り開き、築きあげ

た功績は大きい。昨年、筆者は「明治大学の大学史料」(前掲)という一文をまとめた際、明治大学歴史編纂事務室にのこされた関係資料を通して、同氏の悪戦苦闘のようすと着実な実現化に圧倒される思いであった。あの情熱、あの行動力は完全に私の脳裏に焼き付いてしまった。まだ当時、とある高校の教員であった筆者は同氏を訪ねたことがあった。まさに自らのパワーによって開いたような「歴史編纂資料室」という、まだ一室で大学資料を前に、猛烈な勢いで大学史を説くのであった(用件は別件であったが)。また、いつか、偶然、明治大学の廊下でお会いした時は、手にしている編集したての大学資料集のことを熱心に説明してくれた。さらに、次はどこどこの資料調査をしたいと言って去っていかれた。また、氏は明治大学史の功労者というだけではない。実は本協議会の母体・関東地区大学史連絡協議会の設立の呼びかけ人でもあった。そのパイオニア的な存在については澤木武美氏が全国大学史資料協議会東日本部会編『十年の歩み』に称えられている。宮川氏は50歳半ばにしてたおれた。しかし、不自由な身でありながら、自ら足でかせいだ大学資料について、いろいろと筆者に伝授してくれた。その時の氏の嬉しそうな顔が忘れない。宮川さんは「足」(行動力)の人であった。

(2) 林宥一氏のこと

林宥一氏急死の報を金沢大学の谷本宗生助手から受けた時は別人のことかと思った。最近、金沢大学50年史編纂に関わっていることは彼からの書簡で知っていた。そして、今秋の本協議会全国大会（金沢大学大会）では旧交を温めることにしていた。そもそも林氏と知り合ったのはともに20歳代の時、ちょうど筆者が埼玉県の私立の高校から公立の高校に移った時である。同県川口市の『川口市史』編纂の際だった。当時、彼はまだ大学や高校の非常勤講師をして糊口を凌いでいた。共に属する近代部会では議論をした。近代の農民運動史研究を専門とする彼は抜群の頭のきれ味で、明快に自説を述べた。また時々、大学ノートに構成案を書いては鋭い目つきで沈思黙考している姿を見かけた。筆者とは研究手法が異なるために、よく議論したが気になる存在であり、市史編纂以外にも共に事に当たった。その間、彼は金沢大学経済学部に招かれたが、長期にわたった『川口市史』編纂は全うした。その後、私との音信も続いた。筆者は彼のあの鋭く、かつ冷静な判断力は一生忘れられない。林さんは「頭」（構成力）の人であった。

(3) 調査収集（足）と構成（頭）との関係

むろん、筆者はこの人は「足」の人、あの人は「頭」の人と決め付けようとしているわけではない。一人の人物における比率や印象のようなものである。したがって、両者（頭と足）の比重は時にはその人物の中で変化し、逆転することもあるし、なかには、その双方をはじめから同等に備えている人がいるかもしれない。事実、筆者は宮川さんの近代地方金融の経営分析論等、一方、林さんの案内の 大原社会問題研究所所蔵資料調査等には大いに啓発された。ただ、筆者が言いたいことは足から動く人、頭からはじめる人、いずれにしても資料抜きには成り立たないということである。

(4) 例えば経済学の経済史と歴史学の経済史のこと

同じようなことは、次の場合にもいえる。時折、耳にすることであるが、例えば、歴史

学は資料を集めてから考える、経済学のそれは問題・テーマを考えてから資料を集め。一見、的を得た表現であるとはいえ、完全に言い当てているともいえない。そして、この議論は尽きない。いずれにしても双方、資料が必要、かつ重要な存在であることは一致している。「足」と「頭」を使って、資料の調査収集に努力するしかない。



写真は明治大学での研究部会

2. 広がる資料と大きい資料問題

(1) 一般資料と大学資料

大学資料は一般の歴史資料と比べて、どこが違うのだろうか。確かに大学資料の方は注目されて日が浅い。それに対して一般の歴史資料の方は一定の蓄積がある。筆者も大学に入学し、日本史学生として歴史資料に接して以来、個人研究、共同研究、あるいは自治体誌編纂等々でいたずらに30年余も経過してしまった。また、時には学会誌等の編集委員として歴史資料論を幾度か特集した。

ところが、はからずも10年前、大学史の世界に身を置くこととなり、一般の歴史学（とくに地方史）と大学史の二つの世界に身を置くような格好になった。そうしてみると、別に大学資料は特殊な資料ではないことがたちまちに分かった。ましてや、大学史は特殊な分野ではないことも知った。それに加えて、大学資料に対して、どのような心得や手法を持っていなければ対処できないであろうかという、当初の不安もすぐになくなった。同時に筆者の資料の世界はさらに広がった。いずれにしても大学史資料は特殊資料ではない。

(2) 大学史の「広がり」と「深まり」の中で
以前、大学史の「広がり」と「深まり」ということについて、盛んに述べたことがある(『大学史紀要 紫紺の歴程』創刊号「大学史の広がり」、『大学アーカイブス』No.17「『大学史の広がり』を考えて」等)。やや強引とも思えたが、「広がり」は行政・経営、法人的、「深まり」は研究・調査、教学的としてもとらえ、大学および大学史のために、その両立・複合を唱えたものであった。そうした中で、「深まり」は地道であり、それこそ樹木でいえば根や茎に相当するものであり、それだけにまた重要なものであろう。そして、ややオーバーに言えば、この根や茎こそは大学史でいえば資料に相当しよう。

(3) 多種多様な大学資料

ところで、今まで、この樹木を何かに利用する場合、根や茎は強引に刃物で途中から切り裂かれていた。しかし、根や茎はかなり深いし、意外なものも連なっており、しかもそれは重要な存在であることが分かつてきただ。実際、大学史の場合、G H Q資料やラジオ放送教育、制服、さらには学園紛争時の警備用火鉢、海外学術調査の収集品のように、集約に一瞬戸惑うものも見うけられる。ごく最近では、大正・昭和初期の学園復興関係図面、約600枚の調査収集と処理のために格闘したことがある。土木工学・建築学等々、いろいろと勉強となつた。また、その修復を依頼した紙資料修理工房も技術上、極めて努力されたようである。しかし、これらはきわめて貴重な資料であることはいうまでもない。

(4) 新たな資料問題

① 後回しにされがちな資料

資料にはさまざまなものがあるということを認められてきたということは、よいことである。ところが、それだけでは満足できない。深刻な資料に関する問題が起こっていることも事実である。まず、今日、誰もが実感しているように、効率主義・即効主義、実益主義の問題である。独立法人化の画策はその典型である。また、バラエティ化、パフォーマンス社会の影響もある。テレビ局のクイズ番組制作上の問い合わせに忙殺されるのは、その

好例である。その結果、本務である資料の調査収集等が後回しにされていくのは、ゆゆしきことである。

② 「あるもの」としての資料観

一方、資料はコンビニエンス・ストアの商品のように、きれい整然と並んでいる「シナ」、あって当たり前の「モノ」、そして職員はレストランのようにすぐさま出す「ヒト」のように思われている(卒業論文作成に当たって、そこにある資料以上には探さないという指導者の嘆きなど)。また、資料館等の出納カウンターでも、すぐさま端末機のキーをたたいて、「そういう資料はありません」という機械的、即物的なむなしい応答を耳にするケースが目立つ。資料調査収集の原点は確実に失われている(もちろん、現場職員の責任ではない)。

③ 事務技術論と複雑・瑣末化

大学資料の分野でも、前記したコンピュータ化は急速に進行している。収集資料の分類、所在資料の検索、資料の再調査等々には便利である。しかし、ここで留意しなければならないことは資料所在の明示、目録の作成等はシンプルにしなければならないということである。極力、資料調査収集時の原状が分かり、さらに容易に資料の再調査・次段階の調査ができるように簡潔にすべきである。往々にしてコンピュータ利用に関する議論や作業はやたら複雑化・瑣末化してしまってしまうものである。つまり、何のためにしているのか、わけが分からなくなってしまう。このことは、前掲「明治大学の史料」でも述べたので、ここではこの程度とする。

④ バブルの夢の延長

資料論はいわゆる「バブル」とともに成長したといえよう。大型化というよりも肥大化した建物、万国博覧会日本館のような味気ない施設、ほとんど商業ベースによる展示等々を見聞(見学ではない)するにつけ、少なくとも資料を生かしたものとは言い難い。資料調査の段階では納屋の軒先に掛かっていた農具が博物館の大理石の台座(通称「サイコロ」)に展示されていたという事実もある。また、

文書発見機のようなものはないのかという質問をうけたこともある。本末顛倒も甚だしい。

3. 資料調査収集の原点

(1) 基本・基礎としての資料の調査収集

資料は収集・保存・利用に分類されることが通例である。そして、この並べ方はおおむね一定の作業順序でもある。このことからも一瞥できるように、資料はまずははじめに調査収集なくしては成り立たないわけである。ということは、調査収集は保存や利用を規定する最も基本、かつ重要なことと断定できよう。「はじめに調査収集ありき」である。

(2) 終わりのない資料調査収集

この収集・保存・利用は一回性のものではなく、いわばサイクルである。このことを証明するのは難しくない。なぜなら、日々、資料は作りだされ、また求められているものだからである。また、知りたいこと、調べたいことは次々と湧き出てくるからである。「歴史は続く、調査収集は続く」である。

(3) 史実の明確化

しかし、何と言っても本章で強調したいのは、この項目である。なぜ、私達は大学史に関わるのか、どうして大学資料を調査収集するのかということである。このことを考えたとき、ある日語った筆者の師の言葉がひらめいた。「新しいものを発見する喜びに変えがたいものはない。歴史学とは史実をつきとめ、それとその周辺の関係を知ることだ。」このことからすれば、新しい資料を見出せば、見出す程、実態が解明されることである。筆者も今までなかなか分からなかつたことが、資料調査で「ああ、こういうことだったのか」と分かり、手ばたきをしたことが少なくない。また、以前、校地買収関係の図面とそのために奔走した人の手帳が別々の方から大学に寄贈された際に、その両者が繋がり、事実が明らかになった時はいたく感激した(『LINK TOGETHER』Vol. 8拙稿「伊藤家旧蔵資料とG H Q関係文書」)。一方、自らに都合の良いように執筆を示唆されても資料を盾に拒否するべきだと相談者にアドバイスしたことがある。

(4) 「腐る」本と「腐らない」本の元
筆者は学生の頃、ある本を読んで感動したことがある。實にストーリーが明快で、また厳しい世相の中で資料を求めたとも書いてあった。ところが、何度も読むにつれ、あまりにも出来すぎではあるまいか、こここの微妙な部分が書いてないなどと思うようになった。後年、その書に利用されている資料の所蔵者を訪ねたことがある(実は当主はかなり研究者不信に陥っており、5回目に実現した)。その方によれば、その時は某大先生の弟子が資料を出すようにいってきたという。もちろん、その先生は一度も家に来たことはないとのことであった。

明治大学の附属高校で教鞭をとられた方に伊藤好一先生がおられる。歴史関係の部活動の指導でも定評のあった方である。ぜひ一度お会いして、その聲咳に接したいと思っていた。なぜなら、その謙虚な人柄と地道ながら十分な資料調査に裏付けられた研究から何かを学びとりたいと思ったからである。とくに先生の水車や江戸明地に関する著書や講演には感銘を受けることが多かった。一度、筆者の職場に御夫人と大学資料の寄贈にみえた時は、御夫人をたてて、あまり語られなかった。しかし、先生はその数週間後、おひとりで突然、筆者を訪ねてみえ、じっくりと歴史研究の契機、地方史のこと、資料調査のことを話され、最後に刊行まもない自著をくださった。私の宝物である。しかも、そのわずか後に先生は亡くなってしまった。同じ活字ものでありながら、本には腐るものと腐らないものがある。せめて大学史で刊行するものは腐らないものであってほしい。

(5) 「歩く（足）」ことの意味

歩けば、直に資料に接せられる。前記のように弟子から渡された資料で書いたものには力がない。周辺の出来事との関連といった考察は全く弱い。さらには嘘を書いてしまい、そしてそれが孫引きされてしまうという恐るべきことが待っているし、実際、起こっている。やはり足を使い、汗を流さなければ、良い仕事は出来ないということになろう。



4. 資料調査収集への新たな考え方

(1) 調査収集上の観点と判断

ここでは不遜にも「頭」を使いましょうということを綴る。

① 基本資料と特別資料

資料の分類の仕方にはいろいろとあるが、次のような考え方や方法はどうであろうか。それはまず、基本資料と特別資料という区分である。基本資料とは、その学校や機関にとって最も重要な一等資料であり、永久に保存されるものである。例えば学校沿革史や理事会議事録である。特別資料とは特殊・特異な資料である。例えば開学以前の地域資料や戦時指令書である。そして、もちろん、対極とも思えるこの両者の間には2次・3次資料が存在しよう。

また、「集まる」資料と「集める」資料という区分もしてみた。前者は「集まるようになった」資料といってよいかもしれない。もちろん、資料というものは、なかなか向こうからはやってこないが、日々の努力により、自動的に寄贈や移管される、あるいはされるべきである。とくに、前記の基本資料はそうなるべきである。後者は「集めたい」資料というべきかもしれない。前出の特別資料はそのひとつであろう。あるいは、今日、研究・編纂上、とくに必要な資料、あるいは個人（退職教職員等）が所蔵する資料、さらには散佚・損亡のおそれのあるものやとりわけ大学にとって記念になるものは、この範疇であろう。そして、一般に後者は前者に比べて、どちらかというと調査収集上、主觀的であり、受け入れ時期も不定である。

なお、「集めなくてもよい」資料というものも考えられるが、これは後記したい。

(2) 戰略的な資料調査

① 行事・式典等の積極的な利用

かなり以前、とりわけ戦前の年史は記念式典の引き出物のように扱われてきた。近年では、そのことが批判されている。また、かなり以前の展覧会は一回限りの花火のようであったことが多い。そのことも批判されている。しかし、そのことは批判してばかりではいられない。見直しをすべきである。なぜなら、実際、こうした行事や式典の際は、普段より特別に予算が付くし、また資料に接する機会と時間がはるかに多い。これを機に、今回の冊子作成、あるいは展覧会開催には、資料の調査収集上、どのような観点で、いかにして実施するか、考えればよいし、積み残し分等はなるべく早い時期の編纂・展示をめざせばよいのである。その機会は早い時期にやってくることが多い。

② さまざまな仕掛け

その編纂や展覧会をいろいろとあらゆる手段で利用すべきである。例えば明治大学では昨年、校舎建築を祝うイベントの一環として大学史展を、歴史編纂事務室の主幹で行った。そして、実に多くの方が観覧されるとともに、常設展実現の声があがった。そうした世論を背景に、構内の一等地で年4回（連続）の企画展を開催することとした。学内の関係者・部署も応援や協力をしてくれた。また、学部間共通の授業「日本近代史と明治大学」には積極的に関与し、筆者は事あるごとに大学資料論をぶつように努めている。授業後の会話「うちのおじいちゃんもここの卒業で…」、「何か、おじいさん、持っていない？」

(3) 保管と調査収集

① 収納スペースの心配

本当に資料の保管場所には悩まされる。このことは多くの大学も同様であろう。資料はほしい。だが施設と収納備品がない、というのが大方であろう。とはいって、資料は全部受け入れて、保管すべきかというと議論の余地がある。その結果、考え出したのが、前記(1)の調査収集の観点と判断である。もちろん、他の対処の仕方もあるう。

② 他部署・機関との関連

さきに、私は「集めなくてよい」資料があるかもしれないと述べた。時には「集めてはいけない」資料があると思うことすらある。例えば、大学内で複数の部署や機関が資料を収蔵している場合がある。もし、そこにおいて厳重に管理・保管され、容易に閲覧できるなら、それでよいのではないか。大学史の部署では写真やコピー等で保管すればよいのである。かえって、複数のところで保管する方が安全である。また、そのように考えれば、保管資料の軽減にもなろう。「実をとりましょう」ということである。

③ 自らのあり方

そもそも、肝心なことは自らの部署・機関は何をめざすかということである。あのようにになりたい、このようになりたいというのもよい。しかし、それでは絵空事になってしまう。最も重要な存在である資料、その最初の行動である調査収集ということを中心に考えれば、図書館的な性格を主とするか（この場合は書籍中心）、博物館的なのか（この場合はモノ資料中心）、あるいは文書館的なのか（この場合は文書中心）、さらには記念館なのか、研究センターなのか等々、さまざまな選択肢が待っている。それを決断することであろう。

④ 予算・経費の問題

予算・経費に対する嘆きを耳にすることも少ない。筆者も豊かなそれを否定しない。清貧に甘んじたり、禁欲を貫こうとは思わない。ところが、「では、正確にはいくらほしいのか?」、「何に、どのように使うのか?」と問われると、返答に窮することがある。だめをおすように「一しかないものを十にするのが実力だよ」とか、「プロ野球でもお金があれば強いってもんじゃないでしょ」と諭されると心が揺れる。当然、大学史の場合も調査収集・保存・利用の3分野に分けられる。自らの大学史は目下、どの分野や段階に重点的に経費を投ずればよいのか、その次はどこか。やはり、初めて関わるなら、まずは資料の調査収集面から、そしてそれがある程度備われば、保存の方へ、あるいは元々それらが備わっ

ていれば利用面に配していけばよい。「予算は計画的に、重点的に」と自戒している。

(5) 組織・体制の検討

① 必須の規程と実際の運用

1999年7月現在、大学資料の調査収集に関する規程を有するところは49校中、17校であった。歴史の浅い大学史のことを考えれば、意外に多い。最も例えば東北大学のように調査収集のみの、つまり単独の規程を持っているところは稀有であり、文書の保存規程や取り扱い規程等に含まれている学校が多い。それはそれで良いと思われる。いずれにしても、この調査収集規程は学内外に大学史、少なくとも大学資料に関する仕事を公認させるとともに、またその作業の裏付けとなって、スムーズに事が運び易くさせることは事実である。むやみやたらに規程に頼ったり、いたずらに煩雑なものを作成することはさけるべきにしても、大学資料の調査収集、さらには保存・利用の規程は制定すべきである。

だが、規程はあるが運用されていないと聞くことがある。運用されていなければ、運用すればよいのである。運用しにくかったら、運用しやすくすべきである。かくいう、筆者が勤務する職場の文書取扱規程もあまり運用されていない。

② 調査収集にともなう分業・協業

多くの編纂は、さまざまな立場や職業の人たちによってなされることが多い。大事なことは、そうした関係者は編纂に当たり、十分に時間を費やして編纂目的は当然のことながら、組織や体制をも検討すべきである。その方が、後々のために良い。もし検討が甘いと連携にこと欠き、あげくはお互いのストレスが爆発したり、事業が停止してしまう。やはり「何事も準備が6割を制する」と思える。編纂等も例外ではない。現在、私が主体的に関わっている茨城県の千代川村史編纂の場合は、当初、この組織、体制について、十分に話し合いをしたつもりである。その際に、編纂専門委員長として最も気になったことは、よく耳にするところの執筆者と事務局の関係である。そこで、例えば資料を差し出す人=事務局員、文章を書く人=執筆者というよう

な関係はやめた。共に資料調査をする。共に整理をする。全員が資料のことを知っている。すなわち同じ土俵で資料を探し、資料を利用しようということである。だから編集等の会議では、大企業の円卓会議のように役員が前に座り、一般社員はその後ろに隠れているような配置はやめて、一緒に一つのテーブルで肩を並べよう。「資料の前では平等、その代わり各人の責任は重い」。

(6) 権利・プライバシー等の問題

本稿では、今まで資料の問題は深刻であること、そして、それに対する行動の仕方や考え方の一案を述べてきた。ここでは、その考え方の最後として、もうひとつ大事なことを指摘しておきたい。それは資料の調査収集の際には、資料の所蔵者はいうまでもなく、その地域関係者とも十分に理解し合い、協力して進めねばならないということである。とりわけ、大学は従来、傲慢な態度で略奪的な資料調査収集をしてきている。また、いくら大学に寄贈されたものだからといって、全てが大学のものになったとはいえない。例えば、書簡や日記等の資料は原蔵者らの立場を十分に考慮しなければならない。また、そのためには日々、人権や差別に関する学習を怠ってはならない。

5. 今後の課題

(1) 共同作業の必要

大学資料が多種多様化し、資料問題が深刻化すればするほど、他との連携が必要となってくる。ところが、まだまだ大学史の世界はオープンの度合いが少ない（いささか『大学史紀要 紫紺の歴程』第3号「関東大震災と明治大学」で述べたことがある）。狭い範囲で自己満足しているといつてもよい。しかし、今や学内にあっても従来ではあまり対象とされなかった部署・機関に出向いて調査収集する必要に迫られてきている。例えば、理工学部の実験室、農学部の附属農場、福利厚生の保養所等々である。それどころか、他大学、さらには地域の博物館・公民館等と共同する機会が急増している。例えば、創立者の出身地の博物館との共同事業はその典型である。

ところで、目下、筆者が最も関心を寄せて

いるのは校友関係であり、しばしば、地域に出向いて資料調査に努めている。また、自ら関わっている自治体誌編纂においても時折、遊学の資料等を通して、地方・地域から大学史を遠望することにより近代史を考えようとしている。校友への关心はさらに高じて、徐々に海外を意識するようになった。事実、すでに海外資料調査の実績校が少なくないのである。こうなると単に1校による調査収集では手におえないでの、共同作業の必要を痛切に感じる。

(2) 情報センターの設置

共同作業とともに、より強力なネット・ワーク化が求められる。最も理想とされることは、大学史に関する情報センターの類が設立されることである。大学史の情報を提供したり、あるいは年史等の閲覧ができたり、資料調査等の相談に応じたりするところである。

もっとも、中央集権的な管理運営機関のようにしてはならない。

(3) 他の分野の理解と協同

確かに若い日本の大学史の分野は個別大学内でも学術界でも、急速に認められてきている。しかし、まだまだ大学史の道は険しい。そうした中で、筆者は全く異なる職種や立場の人達に「大学史は大事だ」と、できれば「私も加えてほしい」といってほしいのである。

最近、歯科の医師に次のように言われた。「ああ、シガクね。えっ、それじゃ私と同業だ」「いや、その歯学じゃなくて、史学」「ああ源氏物語の」

むすび

本稿では、深刻な大学資料問題の実態を指摘したのち、次の3つのことを述べた。

① なぜ大学資料の調査収集が必要、かつ大切なのか。それは史実を明らかにするためである。しかも、その第1歩目なのである。そのためには「足」を使って動き回らなければならない。それが「腐らない」ものを創る早道である。

② 歩くばかりではいけないので、今、何をどのようにすべきか、考えねばならない。

その第1は資料および資料の調査収集に対して、一定の観点を持ち、さらに判断をしていくべきである。これが欠けると、何のための行動や作業なのか、わけがわからなくなる。また、資料の調査収集に際しては、従来のあり方を再検討するなりして、とにかく実をとるようにすべきである。また、ここでは、資料の調査収集はもとより保存・利用上、気に懸るところの収納スペースや経費のこと、さらには職務のことや人権等の問題にもふれ、「前向きな」方向の一端を紹介したつもりである。

- ③ 今後の大学資料の収集のあり方はどうであろうか。ここでは大学史、とくに大学資料の重要性が認識される中、今後はとみに

大学内、大学間、そして海外との交流・連携が求められてくること、さらには情報センターのような定置的な連絡・集約・案内の機関が必要になろうということを述べた。そして、最後に大学史および大学資料が対極的な分野やその関係者からも一層、認められるようになることを願った。

以上のようなことは容易なことではない。容易にするためには、本稿の冒頭から述べてきたところの人の持つ「足」と「頭」しかないのであろう。それを駆使された宮川さん、林さんの功績は大であり、いつまでも受け継いでいくべきである。

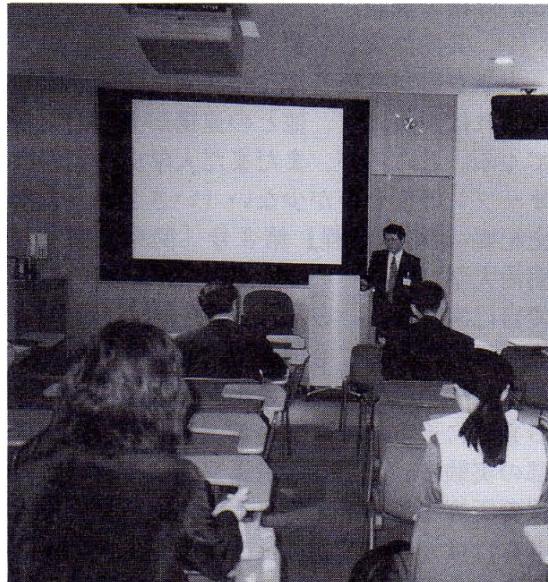
1999年7月7日(水) 研究部会(見学会)

国税庁税務大学校租税史料館見学記

立教大学図書館大学史資料室 池田貞夫

7月7日(水) 第16回東日本研究部会開催、税務大学校和光校舎租税史料館見学会に参加した。平成10年7月、国税庁税務大学校の若松校舎と船橋校舎は和光市に移転し、この和光新校舎は、東上線和光市駅の南約1.5kmに位置し、豊かな自然に恵まれた約10.5万m²の敷地は、研修棟、厚生棟、体育館、学寮棟と屋外運動施設等が完備された研修センターになっている。このキャンパスのエントランス・プラザに面している「租税史料館」(以下、同館)が我々を迎えてくれた。

同館は、昭和43年6月に設置の租税資料室を前身とし、リニューアルしてから2年目になるが、今年は、国税庁が大蔵省の外局として創設されてから50年目にあたり、2階の展示室では「国税庁開庁50周年特別展」(以下、特別展)が6月1日~12月24日まで開催されていて、わが国の租税史を学習できる機会となっている。



解説する牛米 努氏

国税庁の税務行政執行組織は、東京、関東信越、大阪、札幌、仙台、名古屋、金沢、広島、高松、福岡、熊本の11国税局、それに沖縄国税事務所の12ブロックに分けられていて、それぞれの管轄下に合計524の税務署が配置されている。税務行政資料は、税務署の総務課が担当し、それらの資料は12ブロックの研修所経由で同館に集約されるシステムになっていて、現在、約12万点の貴重な史資料が保管されている。

この特別展は、第1コーナー「近代はじめの税制」(近世～明治前年)、第2コーナー「税務署の創設と税制」(明治後半～昭和・戦前)、第3コーナー「申告制度から現代の税制」(昭和・戦後～平成)の時代に区分されていて、それぞれの時代を特徴づける史料が展示されていた。

第1コーナーでは「酒造絵図」と「地租改正地引絵図」が印象に残り、旧藩時代に施行されていた雑税1553種が整理され、地租改正による金納、国税と地方税を基本とする税制となり、明治政府の財政基盤が確立される過程が力説されていた。

第2コーナーでは、日清戦争後に税制の整備が実施されて、明治29年には全国に23の税務管理局と520の税務署が創設された。宮沢賢治の作品「税務署長の冒険」では、密造取締りに活躍する税務署長が描かれているのも面白く感じられた。

とくに、大正14年から個人所得申告書(第三種所得申告書)に「税務署への希望欄」が設けられ、「震災デヤラレタモノデス。手心シテ下サイ」「病人ガアルカラマケテ下サイ」など大正デモクラシーに反映された税務行政の史料を見ることができた。

第3コーナーでは、「国税庁の創設、シャウプ勧告と税務行政、適正・公平な課税への道のり、納税者に開かれた税務行政、税務関係の民間団体の活動、情報化時代に対応した電算システム、国際化の進展」等のタイトルごとに関係資料が紹介され、納税PRポスター、ラジオ・テレビ広報番組「くらしと税金」の



展示室の見学

台本、青色申告制度15周年記念タバコの箱等が展示されていた。

次に、同館の地階の史料保管庫を見学した。ハロン1301の消火設備のもとに集密書架が厳重に管理されており、この最新設備でも約10年で満杯になるとのことであった。

最後になったが、2階展示室へのフロントフロアには、パソコンによる税金体験コーナーとヘッドホーンによる税のPRコーナーがあったが、ヘッドホーンからは春日節による「納税数え歌」が聞こえてきた。

一ツトセ 一人一人の 納税で
住みよい厚木の 都市づくり
そりやほんとだね そりやほんとだね
(略)

四ツトセ 良い道できた 橋できた
あなたの納税 生かされた
そりやよかったです そりやよかったです
(略)

八ツトセ やりくり上手な 妻なれば
納税ぐらいは 苦にならぬ
そりや立派だね そりや立派だね
(略)

十トセ とうとう生まれた 税の歌
街に明るく こだまする
そりや愉快だね そりや愉快だね

出典：「納税数え歌」

製作／キングレコード株式会社
所蔵：国税庁税務大学校租税史料館／
平5－本校－780

本日の租税史料館の見学会では、わが国の税制の過去・現在・未来を知る機会に恵まれることができた。

国税庁税務大学校租税史料館研究員の牛米努氏による懇切丁寧な解説がなされたこと、また、同館事務局の皆様方のお力添えに支え

られていたことに感謝の意を表します。

さて、牛米氏を開む恒例の懇親会があり、和やかさのうちに盃を重ねれば重ねるほど「酒税・消費税」等が函数関係になることも忘れ、もう一盃はもう一杯、「食欲は理性に従うべし」ではないにしても、もう一杯になつても、もう一盃分が「節税」に寄与したのかな？…と思いつつもネオンの花咲く和光市に別れを告げたのだった。

全国大学史資料協議会東日本部会員名簿

顧問
竹市知弘

会員校・担当部課室

愛知大学・愛知大学50年史編纂委員会
〒441-8522 豊橋市町畠1-1
電話：0532-47-4138 FAX：0532-47-4196
学習院大学・学習院大学史料館
〒171-0588 豊島区目白1-5-1
電話：03-3986-0221（内6663）
FAX：03-5992-9219

神奈川大学・大学資料編纂室
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電話：045-481-5661 FAX：045-491-7915
関東学院・学院史資料室
〒236-8501 横浜市金沢区六浦町4834-1
電話：045-786-7049 FAX：045-783-0787

慶應義塾・福澤研究センター
〒108-8345 港区三田2-15-45
電話：03-3453-9580 FAX：03-3453-0254

國學院大學・校史資料課
〒150-8440 渋谷区東4-10-28
電話：03-5466-0104 FAX：03-5485-0152

国際基督教大学・編年史室
〒181-8585 三鷹市大沢3-10-2

(1999年9月1日現在)
電話：0422-33-3057 FAX：0422-33-3634
国士館大学・国士館資料室
〒154-8586 世田谷区若林4-31-10
柴田会館4階
電話：03-5481-5340
実践女子大学・記念事業事務室
〒191-8510 目野市大坂上4-1-1
電話：042-585-8811 FAX：042-585-8808
上智大学・総合調整室別室
〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1
電話：03-3238-3294 FAX：03-3238-3539
聖学院・本部理事長室
〒114-8574 北区中里3-12-2
電話：03-3917-8332 FAX：03-3940-3798

成蹊学園・総務部総務課
〒180-8633 武藏野市吉祥寺北町3-3-1
電話：0422-37-3517 FAX：0422-37-3868
専修大学・大学史資料室
〒101-8425 千代田区神田神保町3-8
電話：03-3265-5879 FAX：03-3265-5923

拓殖大学・創立百年史編纂室
〒112-8585 文京区小日向3-4-14
電話：03-3947-2261 FAX：03-3947-7265
玉川大学・教育博物館学園史料室
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
電話・FAX：0427-39-8643

大乘淑徳学園・長谷川仏教文化研究所
〒174-8637 板橋区前野町5-24-8
電話：03-5392-8855 FAX：03-5392-8853

千葉商科大学・史料編纂室
〒272-8521 市川市国府台1-3-1
電話：047-372-4111（内747）

中央大学・大学史編纂課
〒192-0393 八王子市東中野742-1
電話：0426-74-2132 FAX：0426-74-2203

津田塾大学・企画広報課
〒187-8577 小平市津田町2-1-1
電話：042-342-5113 FAX：042-342-5121

東海大学・資料室
〒151-8677 渋谷区富ヶ谷2-28-4
電話：03-3467-2211（内431）
FAX：03-3485-4962

東京基督教大学・歴史資料保存委員会
〒270-1347 千葉県印西市内野
3丁目301-5-1
電話：0476-46-1131 FAX：0476-46-1405

東京経済大学・100年史編纂室
〒185-8502 国分寺市南町1-7
電話：042-328-7955 FAX：042-328-7500

東京女子医科大学・史料室・吉岡彌生記念室
〒162-8666 新宿区河田町8-1
電話：03-3353-8111(内22213)
FAX：03-3353-8209

東京女子大学・大学資料室
〒167-8585 杉並区善福寺2-6
電話：03-3395-1211(代)

東京電機大学・総務部企画調査課
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
電話：03-5280-3627 FAX：03-5280-3566

東京農業大学・図書館
〒156-8502 世田谷区桜ヶ丘1-1-1
電話：03-5477-2525 FAX：03-5477-2632

東北学院・広報室
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1
電話：022-264-6354・6470
FAX：022-264-6458

東洋大学・井上円了記念学術センター
〒112-8606 文京区白山5-28-20

電話：03-3945-7555 FAX：03-3945-7601
獨協学園・百年史編纂室

〒340-0042 草加市学園町1-1
電話：0489-42-1111（内5267・5260）
FAX：0489-42-6756

日本工業大学・総務課
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡
宮代町学園台4-1
電話：0480-34-4111(代)
FAX：0480-34-2941

日本女子大学・成瀬記念館
〒112-8681 文京区目白台2-8-1
電話：03-3942-6187 FAX：03-3942-6182

日本大学・広報部大学史編纂課
〒102-0074 千代田区九段南4丁目8-24
電話：03-5275-8036 FAX：03-5275-8325
法政大学・総務部広報・広聴課
〒102-8160 千代田区富士見2-17-1
電話：03-3264-9365 FAX：03-3264-9639

宮城学院・資料室
〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話：022-279-7765 FAX：022-279-4707

武蔵学園・記念室
〒176-8533 練馬区豊玉上1-26-1
電話・FAX：03-5984-3748
武蔵野美術大学・大学史史料室
〒187-8505 小平市小川町1-736
電話：042-341-5011 FAX：042-342-5173

URL：<http://www.musabi.ac.jp/history>
明治大学・総務部歴史編纂事務室
〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
電話：03-3296-4085 FAX：03-3296-4086
立教大学・図書館大学史資料室
〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-2693 FAX：03-3985-2819

立正大学・企画広報室
〒141-8602 品川区大崎4-2-16
電話：03-3492-5165 FAX：03-5487-3340

URL：<http://www.ris.ac.jp>

早稲田大学・大学史資料センター

〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1

電話：03-5286-1814 FAX：03-5286-1815

全国大学史資料協議会東日本部会 幹事会議事録（抄）

全国大学史資料協議会東日本部会 1999年度総会議事録（抄）

日 時 1999年5月28日(金) 14時～16時
 会 場 実践女子大学 香雪記念館
 2階 第2会議室
 出席校 24大学 3個人会員
 竹市 知弘氏（顧問）
 オブザーバー
 吉富 達彦氏（高等教育史研究会）
 計39名
 開会の挨拶 東海大学 大森 悅郎氏
 会場校挨拶 実践女子大学 城田 秀雄氏
 議長の選出
 議長 明治大学 鈴木 秀幸氏
 副議長 立教大学 池田 貞夫氏
 議 事 1. 1998年度事業報告・同決算報告
 について（承認）
 2. 1999年度事業計画案・同予算案
 について（承認）
 3. その他
 閉会の挨拶 中央大学 村松 良人氏
 懇親会 15時30分～17時 出席者38名



1999年度東日本部会総会（5月28日）

- 第19回 1999年3月15日(月) 13時～14時
 会 場 明治大学 大学会館 5F
 父母会センター第2会議室
 出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 実践女子大学
 東海大学 中央大学 明治大学
 中野 実氏
 議 事 (1) 1999年度の事業計画について
 (2) 会報発行・記念誌編纂の件について
 (3) その他
- 第20回 1999年4月15日(木) 13時～14時
 会 場 実践女子大学 事務センター 3F
 第3会議室
 出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 実践女子大学
 東海大学 中央大学 武藏野美術大学
 明治大学 中野 実氏
 議 事 (1) 1999年度の部会総会について
 (2) 会報発行・記念誌編纂の件について
 (3) その他
- 第21回 1999年5月28日(金) 13時～14時
 会 場 実践女子大学 香雪記念館
 2階 第2会議室
 出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 実践女子大学
 東京農業大学 東海大学 中央大学
 日本大学 武藏野美術大学
 明治大学 中野 実氏
 議 事 (1) 1999年度部会総会の運営について
 (2) その他
- 第22回 1999年7月7日(水) 14時～15時
 会 場 国税庁 税務大学校 租税資料館
 1階 説明室
 出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 実践女子大学
 東海大学 中央大学
 武藏野美術大学 明治大学
 中野 実氏
 議 事 (1) 1999年度の研究部会について

- (2) 1999年度の全国総会・研究会の運営について
- (3) その他

全国大学史資料協議会東日本部会 研究部会記録（抄）

第15回 1999年3月15日(月) 14時～16時30分
 会 場 明治大学 大学会館5F
 　　父母センター第2会議室
 参加校 19大学 3個人会員 31名
 報 告 鈴木 秀幸氏
 　　(明治大学 総務部歴史編纂事務室)
 　　「大学史料の収集と整理について」
 コメント 秋山 俱子氏
 　　(日本女子大学 成瀬記念館)
 第16回 1999年7月7日(水) 15時～17時
 会 場 国税庁 税務大学校 租税資料館
 　　説明室・展示室・資料収蔵庫
 参加校 18大学 1個人会員 21名
 案 内 牛糸 努氏(租税資料館研究員)
 　　「税務大学校 租税史料館の概要と
 　　展示・収蔵史料について」
 ※研究部会の内容につきましては、本号に掲
 載した池田貞夫氏の報告をご参照ください。

三二情報

* 明治大学関係

1. 大学史刊行物

- (1)『大学史紀要 紫紺の歴程』第3号
 　　(大学史料委員会)
 　　今号は「明治大学と駿河台」を特集し、「幕末・維新期の神田界隈」(加藤隆)等、6つの論考を掲載している。また、随想欄には「時代の風」(阿久悠)以下、5つの作品を収載している。その他「人物点描」「大学史ノート」等々、バラエティに富んでいる。
- (2)『歴史編纂事務室報告 明治大学の大学史料』第20集 (歴史編纂事務室)
 　　大学史料に関わってきた同室が、今はとくに大学史料の収集と整理を中心と今までの経過を振り返るとともに、今後の課題を模索したものである。さらに、

史料の活用についても昨秋の「明治大学展」を中心にふれている。

2. 歴史展

明治大学小史展

明治大学にとってははじめての試みとして小規模ながら歴史展を開催することとなり、第1回目は大学会館1階ロビーにて2月25日～5月31日まで「学園をみまもってきた記念館」というテーマで開催した。その後、第2回目は同所で「神田・御茶の水と明治大学」というテーマで6月15日～10月25日まで行ない、現在は、第3回目として同会場で「ある戦没学徒の生涯」というテーマで10月26日～2000年1月31日まで開催している。

以上の問い合わせは明治大学歴史編纂事務室 (TEL 03-3296-4085 FAX 03-3296-4086) までお願ひいたします。

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

慶應義塾大学・福澤研究センター

〒108-8501 港区三田2-15-45

☎ 03-3453-0254

中央大学大学史編纂課

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

☎ 0426-74-2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045-481-5661

東海大学資料室

〒151-8677 渋谷区富ヶ谷2-28-4

☎ 03-3467-2211

中野 実 (東京大学大学史史料室)

〒113-8654 文京区本郷7-3-1

☎ 03-5841-2077